先心

せんしん

29号　2019年5月8日

火の用心の歌

一

たの、たの用心、たの用心
出して頂きます生きの為が手板
たまたは注意の隙間から
アッチ、ゆ数、たまひ、隙たち
落れ心のたの注意。

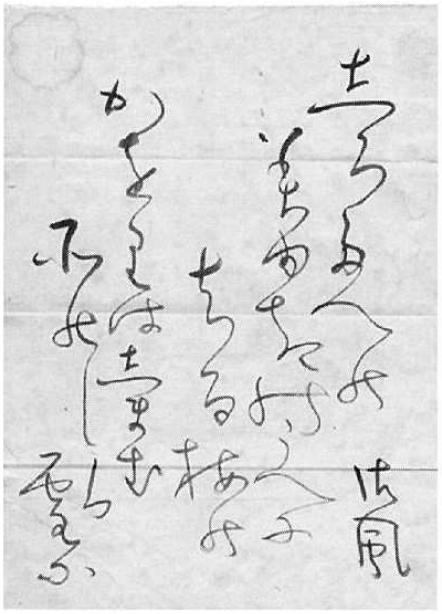
御風会会報

寄稿

亡父・渡部元と相馬御風

大阪府　渡部　宏

〈一〉



・しろたへのみゆきのうへにちる梅の
かをりはしまむそのしら雪に　御風

冒頭に掲げたものは、戦況苦しきある春の日、父・渡部元が御風先生から直接いただいた先生自書の歌である。

この歌には便箋五枚の長文の手紙が添えられており、これが父の書架に封筒に入った状態で、父の死後もずっと眠ったままになっていた。

ところが、父の三十三回忌も過ぎたある日、膨大な量の手つかずの遺品の山の中に、ふとこの御風先生からの封書が目に止まり、私は初めてその内容に直に触れることが出来た。記された日付は昭和十九年四月三日。投函からすでに七十五年の歳月が流れ去っていた。

先生独特の難しい草書体の文面を記念館の金子善八郎先生のご助力をも仰ぎながら何とか判読することで、私はこの歌が先生手ずからの長姉（享年九歳）への弔歌であることや、戦中の父の文芸活動の様子などを初めて知ることになった。

〈二〉

以下長くなるが、御風先生からの書簡の要点のみを抜き書きさせていただく。

「同封の歌お供へお願ひ致します。御懇書くりかへし拝見、老涙抑へがたき次第でした。謹んで合掌、はるかに御令嬢志津子さまの御冥福を祈り上げました。」

「前にも申しましたやうに、長男と三男と四男を早世させました悲痛な経験をもつ小生には、貴兄並にご夫人の御哀傷のいかばかりでおありかは、よくお察しすることができます。御示しの御歌、身にしみて拝誦致して居ります。」―略―

「雑誌も紙不足その他による出版事業の整備の為、国策に随順して或いは発行を一時停止することになるかも知れません。そうなりましたら、応召の心もちで踊躍その挙に出る決心です。

但し、木蔭会は飽くまで存続して、せめて同志の詠草を同志で読み合ふことをつづけていく何等かの方法を工夫できると信じて居ります。その点御安心願ひます。

この事については目下当局と交渉中ですから、近く何らかの決定を見る筈です。」

―略―

「此度の御歌はさすがにすぐれて居ります。愛孫を失はれた御祖父兄、御祖母兄の御嘆き様をお察し致しますと、老愁堪えがたき感が致します。」

〈三〉

話は相前後するが、実を言うと明治十二年生まれの私の祖父・渡部坦治は、大正九年から同十四年まで糸魚川高等女学校の校長をしていた関係で、御風先生とは文化講演会などでご一緒させていただいたこともあり、長く懇意にしていただいたようである。

また、父・元が糸魚川中学校五年のとき（大正十一年）、高田新聞の旅行依託学生として関西旅行が許され、その紀行文が七回にわたり紙上に掲載されているが、そのおり父は直接、御風先生より早稲田大学への進学を強く勧められたということである。

〈四〉

父はその後上京し、先生のお言葉通り早稲田に学び、英詩を研究。卒業後は大阪の女子師範で教職に就きながら、当時勃興した新詩運動（百田宗治「椎の木」同人）にも参加。その後、御風先生を慕い三十歳を過ぎて歌作

に発心、昭和十六年より「木かげ」同人となる。

以上は、後年父自らが記した略歴から知れるところであったが、「木かげ」および「野を歩む者」への寄稿については遺品の何処を探しても見当たらず、とりわけ御風先生から幾度も言及された長女への哀歌がどのようなものであったのかが、私として最も気に懸かるところであった。

〈五〉

そうした折、良寛・御風の歌や書に関心を持つ愚息（仙台居住）からの誘いもあり、昨年暮れ、高田の墓参も兼ね糸魚川の御風記念館を訪問することになった。

金子先生より丁重な館内のご案内をいただいた後、父の歌集への寄稿について面倒な調査をお願いしたところ、快く引き受けていただいた。

その日は、記念館を後にして、御風墓の参拝、御風宅の見学をし、さらに往時の渡部家の住居跡として、横町・押上・上刈・清崎の地を訪ねた。家はすべて建て替っていたが、父が歩んだであろう田原酒造前の道はバス通りとして、また清崎の丘上から見えた機関庫の壁面は遺跡として駅前に残されていた。

〈六〉

帰阪後ほどなく、両歌集への父の寄稿歌・文が大部のコピーとして送られてきた。それは昭和十五年六月から同二十二年八月にかけての二百十首と万葉集研究論文であった。

私は初めて目にする父の歌であったが、何か懐かしく熱いものを感じながら貪り読んだ。・・・

・花過ぎし鉢梅の木に春の雪
　淡くも白く花と咲くかも
・おほ母の恵みはことに深ければ
　いまはの水もいただきにけり
・みほとけの國への旅に読めよとぞ
　柩に入れぬ「良い子の友」は

（「亡児志津子にささぐ」十一首より）

私はこの哀歌並びに七年にわたって寄稿された他の歌をあわせ読んだ後、再び御風先生の冒頭の弔歌と書簡を拝読した。歌も言葉もより深い調べとちからをもって歌われ語られているのに気がついた。私はそのとき、改めて御風先生の傷心の門下を想う優しく強い歌心を感じたように思った。

ごくたおやかにそれを可能にしているものこそ、戦中の厳しい状況下にあっても門下の詠草を命がけで守ろうとされたお心の尊さであると同時に、ご自身の体験の中に刻まれた内なる心の深い痛みなのではないかと私には思われた。・・・

・母を呼び母を待つだにあるべきを
　もだしていにしなれがいとしさ
・わが元雄ふた親に似ずしゝふとく
　心ゆたけくそだちしものを
・息たえし二た時前を窓の外の
　とんぼをほしといひにけらずや

（『御風歌集』大8）

〈七〉

父（北星）は戦後、飯田蛇笏門下として雲母大阪支社で再び文芸（俳句）に精進するようになる。

・寒すばる枝すく風のたゞ迅し　北星

（昭和三十四年「毎日俳壇」飯田蛇笏特選／平凡社「俳句歳時記」冬の部採録）

しかし戦後十年間の「文学的空白」を経た晩年の句作の充実において、父は何を拠点にして濃密で自在な心の感受をもちつづけることができたのだろうか。父の胸底にはいつも、かつて自らが学んだ御風先生の歌作の心の灯が点り続けていたように思えてならない。

1980年頃の渡部　元

『相馬御風書簡集』下について
―原田勘平との交信・交流

金子　善八郎

一、

糸魚川市教育委員会は、先に『相馬御風宛書簡集』四巻を発刊しているが、このほど、『相馬御風書簡集』上―家族への書簡、下―友人・知人への書簡、を出版した。

『相馬御風宛書簡集』Ⅳに、相馬御風に宛てた原田勘平の書簡が収載されており、『相馬御風書簡集』下巻には、原田勘平宛ての御風の書簡が、載っている。

ここでは、その書簡によって二人の交流・交信の跡をたどり、その実際がどんなものであったか明らかにしたい。

二、

原田勘平は、明治二十年（一八八七）、新潟県西蒲原郡間瀬村に生まれる。新潟師範学校に学び、県内の小学校の教師となり、太田小学校、木山小学校等の校長を歴任する。

そしてこの間に、分水町中島の原田家の養子となる。原田家は、分水町真木山の庄屋、良寛と同時代の原田有則・鵲斎、正貞父子は、共に医師で良寛と親しく交流した人達である。

原田家の人となった勘平は、当然のように良寛を研究、『良寛詩集』（岩波文庫）、『良寛』（筑摩書店）を出版して、「生きた良寛辞典」といわれた。（『良寛百科』・加藤僖一による）

三、

相馬御風と原田勘平が邂逅したのは、大正六年（一九一七）七月、御風の「良寛遺跡めぐり」の旅でのことで、その時の様子は、早稲田文学の大正六年十月号に記録されている。

「道をたづね〳〵私達は四十分ほどを費して原田家に着いた。原田家の当主は年はまだ若かったが、いかにも趣味の豊かな、精神的な傾向の人で、特別私達を迎へてくれられた。私は此の原田家の当主ぐらゐ深い理解を以て良寛に対してゐる人は、おそらく此の地方にもさう多くはあるまいと思った。」「私は此の人といつまでも此の良寛と密接な関係を持つて居た家のうちで、心ゆくまで語り会ひたいやうに思ったが、汽車の時間の都合や何かの為にそれの出来なかったのはひどく残念であった。」

四、

前述した御風宛書簡集には、御風に宛てた勘平の手紙、大正六年八月二十七日付から、昭和十二年一月一日付まで十五通（他に年代不明一通）が載っており、御風書簡集には、勘平に宛てた御風の書簡、大正六年七月二十三日付から昭和三年十月二十二日付まで、七通が記載されている。

以下、この往復書簡の内容を日付順に紹介する。

・大正六年七月二十三日付、勘平宛御風書簡

遺跡めぐりで見せてもらった良寛遺墨の巻物二巻は、「西郡氏の調査もれと拝見仕貴重の御品のやうに存候へば何とかしてあの中の歌だけでもうつさせて」もらいたい。

そして一か月後の八月十九日付勘平宛御風書簡。橘屋が所払いになったときの「良寛師述懐の長歌二首」が、偶然地元の牧江家の「蔵品中より発見」された。また、良寛と藤原光枝との関係―「何時頃」から始まったのか「御教示被下度」というもの。

これに対して御風宛勘平の八月二十七日付書簡。由之の「退陰」について、所持している「手簡一枚」を「写して呈上する。」光枝と良寛の関係については、「定珍老の宅に滞在せられし時上人と知り合ひに」なったのではないか。定珍と光枝の関係は「定珍は三年程江戸に滞在勉強した人」なので、その時知り合ったのではないか、と応えている。

次に御風の勘平宛大正六年九月十四日付書簡。勘平の北越新報に発表した「田連居雑記」を断りなしに転載したことのお詫びと、『全伝』（偈の訂正しある分）を暫時拝借したい、と。そして、良寛のことが「国定教科書」に載る事になったことを喜び、「近き将来に於て良寛の名が日本の天空に大きく書かれ仰かるゝの日あるを信じ申候」と書いている。

これに対して御風宛勘平の九月十八日付書簡。「鵲斎の師の岑少翁と狭川先生を同一人なりと見た」のは私の誤りなので、早稲田文学に紹介する際には訂正して欲しい。要請の「全伝」は宅に置いているので、「帰省次第御送申

候」と。

また、「只一言申上度ハ中島の玉木礼吉氏が疑問もあれど多くの材料をもって居られ候故何とかして未だ世間に出ぬのをゆづり受けられたらばと蛇足を添へて申上候」と普通には考えられないようなことを提案している。

御風は早速、九月二十二日付勘平宛書簡で、「それにつき近頃玉木礼吉氏が詩歌集出版の為め上京されるとか云ふ話を出雲崎の佐藤吉太郎氏から聞いたが、～それが事実でないとしても玉木氏の材料をある程度までゆづり受けるとしたらどう云ふ方法」があるのか、永年にわたる苦心の成果を「私としてハそれをゆづってくださいと御願する事ハあまりに勿体ない気がしてならない」ので、「何とか一つ尊兄の御教示を仰ぎ且御尽力を仰き」たい、と書いている。

御風宛勘平の七年一月十四日付書簡。「良寛上人逸話面白く拝見仕候」、それから「有願和尚は画の出来た人にて」「といって応挙の画いたチンコロに讃した事」に触れている。

七年十一月三日付、勘平宛御風書簡。「過日は突然拝趨いたし」とあり、その時、原田家の巻物の「題字」を、御風が書いて届けたことが書かれている。

―交信は、それからしばらく途絶える。二年後の大正九年二月十八日付、御風宛勘平書簡。今、後援者を得て、蔵雲の伝記出版の準備にかかっているが、いまだに詳しいことが分からなくて困っている。「何か御調べになっていることがございましたなら御聞かせ願ひ」たい、と。また、御風が所持している「蔵雲和尚の書幅」の写真を口絵に使わせてもらえないか、と。

大正九年四月十三日付、勘平宛御風書簡。「おかげ様にて光枝のこと一通り相わかり候」と「御教示」の礼を述べ、鵠斎、正貞の事は「此夏中～ゆる〳〵教示にあづかり申度」と再訪を告げている。

また、このとき福田静処の「粗画一葉」を呈上している。

それから一年後の大正十一年九月二十日付、御風宛勘平書簡は、「良寛和尚周囲の雅号調」で、正誠（地蔵堂富取武左エ門）、林国雄の娘千代子、など六十五人もの多くの人の雅号についての所見が書かれている。

この書簡に対する御風の返信は見当らないが、それから二年後の、大正十三年七月四日付、御風宛勘平書簡があり、そこに書かれていることを以下に連記する。

・校歌の作曲者、弘田（龍太郎）の作曲が遅れて困っている。

・森山君の屏風、ようやく読むことができたが、まだ何字も読めないところがあるので、「一度貴下様」にも見てもらいたい。

・国上寺の「湖月抄四十巻」の各冊に「のこしおくこのふるふみはするなかくわかなきあとのかたみともなれ」とあるのを「発見」した。

・鵠斎の遺稿からすると、良寛が五合庵に入ったのは「三十八九才」のことになる。

・夏季大学に「貴下様の御出での頃一両日都合して出かけたい」と思っている。

十月二十六日付、御風宛勘平書簡。

・三条の地震の時の話を発見した。

・蔵雲の印刷した詩稿、あったら教えて欲しい。

以降の御風宛勘平書簡は、類焼見舞、年賀状、テル夫人逝去の悔やみ状などである。

五、

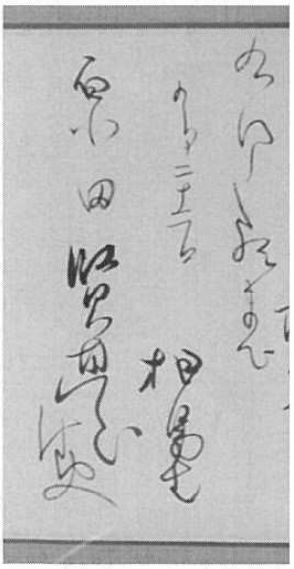
一、二人の交信は、交流の始まった大正六年が最も頻繁で、それ以後は年ごとに少なくなっている。

一、初めて会ったとき御風は、先行者勘平への敬意からか勘平を高く評価している。

一、この勘平評価に、御風の良寛研究の能度、良寛に対する姿勢がよくあらわれている。

一、「御教示」という言葉、始め御風が多く使い、後に勘平が多く使うようになっていて立場が「逆」になっているように見える。

一、この交信の記録は、見逃せない良寛研究史の資料だと思う。



昭和3.10.22書簡

御風と八一
―その性情は対照的と言えようか―

蛭子　健治

新潟県の近代の文人二人を上げろと言われたら私は躊躇なく相馬御風と会津八一を上げる。

御風は県西旧西頸城郡の郡都糸魚川の出身であり、八一は県都新潟の出身である。

御風は八一の二歳年下の明治十六年生まれであるが、共に明治三十五年東京専門学校（現早稲田大学）に入学、明治三十九年七月校名改まった早稲田大学文学部文学科を卒業している。

御風は評論家、詩人、歌人と称され片や八一は美術史家、歌人、書家と言われているがさらに共通する御風の良寛とまでもないが、八一の良寛への親しみと関心があり御風もまた書をよくしている。美学、美観への八一との共通する面もある。

こうした相似た二人ではあるが、その性情は実に対照的であるというのがよく言われてきたことである。

御風の女性的に対して、八一の男性的、同様、柔に対して剛　やさしさ、おそろしさ　理想的、現実的　軟かく暖かい、烈しく強い　抱擁力、近寄り難い　肩やわらか、肩ひじを張った等々であるという、確かにその通りと思われる一方、果たしてそうかなという疑問が湧き起こってくる。

次にあげる御風についての言動と営為から私見を述べてみたい。

まず、新詩社脱会新誌発行についてであるが、あれ程新詩社の将来を嘱望されていた御風が前田林外と脱会、「百百合」を発刊、三十六年十一月創刊号で「―略―四足多足なるものゝ熱に驕り此の荘厳なる霊境に狼藉して可なるか、是れ我等が非才を顧みず敢て茲に革新を絶叫せんとする微意にこそ―略―」と、高田の友人川合吟風に送った手紙に見られる晶子の妊娠をすっぱぬいているところなどから、新詩社上層への嫌悪、批判、否定、挑戦の断固烈々たる旗幟高揚の宣告であり、耿潔な文学青年の剛毅なまでの意気に圧倒される。

剛という性情は御風の原質ではなかろうが

次に良寛の万葉集研究の先鞭は歌壇の巨匠斎藤茂吉で大正三年三月より「アララギ」に連載翌々年四月「短歌私鈔」として出版し、さらに同誌に連載を続け、翌年四月これをまとめ「続短歌私鈔」として出版する。

御風も大正六年四月から早文に良寛研究を連載、翌年二月には「良寛和尚詩歌集」続いて五月「大愚良寛」を出版する。以後御風、茂吉は良寛研究で交流を持つ。

大正十年二月御風より茂吉に宛てた書簡の中で「―略―小生そのうち良寛和尚の万葉集に関し候資料のみ相集め（最近珍材料の発見も有之候まゝ）一冊に相まとめ刊行致し度心組に御座候が、その節これまで貴台の御発表相成候良寛和尚に関する御高説中より特に右の題目に関係有之候箇所のみ抜萃仕り転載の義願申上度存じ居候が、此義如何に御座候哉貴意御伺申上候―略―」とある。

大御所茂吉の研究成果を御風自身がまとめる一冊の中に掲載したいのでどうでしょうかというのである。良寛万葉研究の大成は己の使命であるとの豪放とも剛毅とも断じ難い御風の態度をみる思いであるが如何あろうか。

こうした侠気、剛胆とも思われる御風の性情が最も発揮されるのは大正十一年二月三日に発生した勝山隧道雪崩事件の犠牲者の遺族の生活補償に時の県知事太田政弘を平安堂旅館に訪ねて対峙した時であろう。知事への御土産にと持ち込んだのは、百官戒めの良寛歌軸と相馬家伝来の小刀であり何れか一の選択を任ねた。

御風は熱涙を払い払い雪国の主要な幹線北陸線の交通維持確保のための奉仕作業の犠牲者であることを訴えたという。何としても嘆願要求について知事の同意を得なければならなかった。知事は軸を選んだ。同意の意志である。

後日知事は鉄道省と折衝、嘆願要求は実現した。

都市社会での生活が「やくざなからっぽなゆるしがたい妄想者を」つくり出したといい

自己改造は都市生活では不可能で田園生活でなければならなかった。

いろいろ説は多いが大正二年七月三日の牛込清風亭で開催の「芸術座」旗上げまでの先頭に立っておりながらやはり逍遥に顔向けならない立場にあることは悟らざるを得ない自己の信ずるところに従い糸魚川退住への機とした。

大正七年抱月の葬儀に上京、以後その死まで上京を拒否し、また昭和六年十一月以後の乗車（汽車）拒否も都市生活撤退徹底に深く連鎖する。

剛毅なまでの営為であろう

昭和十七年ビルマ戦線に復帰する「木かげ」の若き門弟甲村忍を羽織、袴で糸魚川駅頭に見送り「読後捨てよ」との甲村生還の切なる冀求の紙片、万が一明らかになれば御風は反戦文人のレッテルを貼られ社会から葬られるであろう恐れをも顧みない行為であった。

柔と剛　御風と八一は真逆

以上述べたが、これが女性的で柔なる御風であると言えようか。八一との実証的比較なしで述べてきたが、この稿を結ぶにあたり、後添えみわとのエピソードと八一の若き日より心を深く寄せた人と最晩年の血縁の若き養女との秘話を述べておこう。

みわが相馬家に入ったのはテル夫人の死から約二年後の昭和九年からである。

相馬家の家政を預り、御風の助手役をつとめ一歩一歩主婦としての位置を確かなものにしていくことを快く思わない歌の門弟や周辺出入りの人々があったといわれる。

みわが相馬家に入って幾年かして、門弟有志の計らいで、御風とみわとの距離を引き離すべく、某新聞記者を招いて御風に詰問しようと、御風、みわ、記者、有志四者が話し合う場が設けられた。

御風とみわとの関係如何にというのは記者の最初の御風への質問であった。御風はこれに対し「この御風は独り者である。そこのみわもまた独り者である。独り者と独り者の間に恋心が芽生え、愛が生じたとして、それが一体どうしたというのか」この集まりの設営は全く誤算であった。ただ圧倒されて記者と有志は居たたまれず沈黙につきおとされ、すごすごと退散するしかなかったという。

御風は詰問されるべき場を逆手に、後添えを正式な主婦として容認される場の転換に堂々たる成功を得た。

八一伝記によればその若き日従妹周子の友人女子美術出の渡辺文子に心を寄せ、文子も好意的であったが文子は将来を嘱望された宮崎与平に嫁いだがその生活は短く、与平二十五歳、明治四十五年六月世を去っている。

大正七年に至って文子は東洋船舶の船長亀高五市に母と子供を連れて再嫁、八一が大森の亀高家を訪ねたり文子が八一を訪ねたりという交流があり、八一妹琴亡き後の医師のもとに請われて文子の娘を仲介している。

また決断なきまま糸魚川行断行まで長年月を費やしているし、さらに最晩年には八一は血縁の若き養女との秘められた交わりが門弟によって明らかにされた。これらは柔の八一の面を思わせ、先に述べた御風の数々の言動と営為は信念に生きた剛毅な御風像を彷彿とさせる。

御風の男性的、剛である面は明らかであり、八一の女性的、柔なる面は理解されよう。

相馬御風と蓮台寺

松野　功

相馬御風は、蓮台寺に松野泰助が居たことによるものか、また、蓮台寺には四季の花があったり、歴史的景観があるためかよく来ていたように思われる。

泰助は号を一畝といい、御風より八歳年上であったが田舎まるだしの素朴さが御風に慕われたようで、大切にしていた雲照律師の下書原稿に御風が奥書をして泰助にやるほどであった。御風の手紙には「京都へ出て重態の眼病治療中の親友松野一畝君の為にどうぞ一片の御同情と御喜捨とをおよせくださることを私から特に御願いたす次第で御座います。松野君がひどく貧乏ではあるが反対にひどくいゝ人であることは今さら申すまでも御座い

ますまい―」とあったり、手紙で留守居を頼んだり御風との信頼関係の深さがうかがえる。

何すれぞかく大きなるいけにゑの
むなしく雪と消えはてめやも　大正十一年

大正十一年二月三日、勝山トンネルで起きた大雪崩で九十名以上の命が失われた大惨事を相馬御風は『相馬御風著作集第二巻』「また冬が来る」で次のように記している。

「―全くあの親不知の惨事の追憶はいたましい。就中多くの惨死者の中でもF―と云ふ青年の事はわけて私にさま〳〵の追憶の種となっている。（中略）F―は私達の町の山際にある小さな農民部落の者であった。私はその部落へは三、四年前から度々行っては、何かとそこの人達の話相手となってゐた。」

山際にある農民部落とは、四十戸ほどの小さな蓮台寺村。F青年は姓を古木といい、村の青年会長であった。退住間もない御風は蓮台寺へ行って同い歳の青壮年達と親しくしていたことがわかる。その仲間達の十三名が雪崩で亡くなったのである。

親不知殉難の顛末については、当時町長であった中村又七郎は『おこぜ随筆』に詳しく書いてはいるが、その中に相馬御風の働きについては一言もふれておらず、慰謝料の多く出たのは又七郎だけの力であったようになっている。御風もまた人の機微の点からこの大惨事について詳しく書いているが弔慰金については書いていない。

猪又美和の『御風聴聞記』にこの時の御風の動きが詳しい。美和は茶飲み話かなにかで聞いたものか、御風はこの時、糸魚川町の国恩会という青年会の会長をしていた。当時、除雪の臨時人夫では死に損でわずかな香料しか出なかった時代、折に、県知事が現場視察に来糸した宿舎、平安堂に御風は、家伝の短刀一振と良寛の掛軸を持ってこのたびの窮状を訴える直訴に及んだ。御風は熱涙を払いながら、惨死した人々の行為は立派な社会奉仕であることを説き、人命尊重論を述べ、気の毒な遺家族の力になってほしいと訴えた。

御風は知事の宿舎を引き上げるその足で町の警察署に出頭して縛ってほしいと願い出たが、青年会が大惨事の救助に大活躍をしていることを知っていた署長は御風を縛れずに困っていたとある。

その後国が動き急速な好転を見せ、犠牲者一人〳〵に天皇からの下賜金があり、多大の慰謝料が下附された。

蓮台寺の人達も大いに助かり、大正十三年、亡くなった十三名の殉難碑を歌相馬御風、撰と書中村又七郎、世話人松野泰助らによって村の中心に建立した。村の遺族は今でも中村又七郎のことを言うが御風のことは言わない。

蓮台寺の丘の上なる友が家も
見え透くまでに落葉せりけり（大正十三年）

蓮台寺の丘の友とは内島北朗。北朗は、明治二十六年生まれ、富山県高岡市の人で陶芸家、俳人。大正八年、御風の依頼で糸魚川焼を指導したとある。

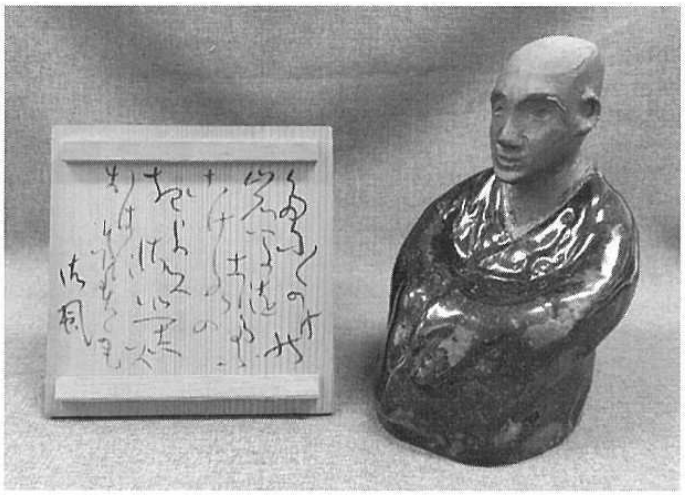
昭和八年の御風宛書簡に「―松野氏よりたよりちよい〳〵有なつかしく又木氏又一年に一度位顔を見せいつまでも蓮台寺の夏を偲びます―中略―全く糸魚川で窯を焚いてゐた時の事を思ふと感慨無量です―」又、別便に「―封書を開く中より雪の静かなる夜の浪音の歌拝受　これは〳〵と欣び御礼申上候　まことに此世のものとしもなき感にうたれます　糸魚川の浜を淋しく思ひ浮かべます　そして蓮台寺の丘の家を思ひ楽窯を思ひ　町より丘の家へもどる夕べの野道のヒイヤリと蛙の小便を感じたりさい（ママ）致し候―」とある。

北朗の蓮台寺の丘の家とは、どうも私が現在住んでいる所らしい。ここは明治の初めまで天満宮があった所で、維新の合祀令により建物は稲坂にもらわれて行き、神は七社に合祀されて村の空地であった所へ御風に頼まれて松野泰助が斡旋したと思われる。

大正十四年に北朗は荻原井泉水に伴われて糸魚川を訪れているので、北朗は大正十三年まで住んでいたものと思われ、蓮台寺の旧家では北朗の作品と米を交換したことが伝えられている。

又木については、昭和十二年の『野を歩む者』に「久しく消息の絶えてゐた旧友又木淳二君がいつの間に陶工になり―略―無軌道生活者の又木君を私の郷里退住と共に糸魚川に住ませ何かにつけて煙たがられの役割を私が

させられてゐたのは、いつしかもう二十年の昔になった。」とあって、又木もまた御風の世話になっていたことがわかる。先の北朗の文からして、又木は北朗と同居していたのではないだろうか。



内島北朗作良寛和尚陶像
昭和８年作。「野を歩む者」を通じ頒布された。

蓮台寺の五百羅漢は見ず久し
羅漢和尚のたれ眉もまた　昭和十二年

羅漢堂の隣は、蓮台寺村の元村社の七社。神社の正面には太々と御風の書による社額が掲げられている。

拝殿には古い俳額がある。享保十一年、高野九蚶の仲間が蓮台寺で「梅と神の森」を席題に詠んだもので、加賀之井六代小林与一郎坡什が奉納したが古くなったので、文政十年加賀之井十代小林与一郎宜雨が再奉納したもの。この横に並ぶのが相馬晧が奉納した小型絵馬二枚。その一枚に白馬が描かれ昭和十二年とある。

公会堂には、扁額一面と、美山公園の歌碑の元になった「大ぞらを」の軸がある。これには「昭和六年十月青年会長渡辺栄蔵揮毫していただく」とある。村では御風の書を持つ家が多くあって相馬家と蓮台寺は昭和に入っても親しくしてきたことがうかがえる。

【事務局付記】

蛭子先生、松野事務局長の原稿で述べられている勝山隧道西口雪崩事件に際し、御風が時の新潟県知事太田政弘を平安堂旅館に訪ねて直訴した逸話は興味深い。御風は「木かげ」第八十号（昭和十四年四月発行）巻頭言で、そのことと推測される件について触れている。

うちわたすつかさつかさにものまをすもとのこころをわすらすなゆめ　良寛

（中略）

私はその歌稿を家宝の一つとしてゐた。しかしある時或大事件に際会し、どうしても或重要な人の覚醒と決断を促さねばならぬ場合に立ち至つた為、私はその大切な一軸を一大決心を以てその人に贈つた。しかもそれが一つの大きな動機となつて、さしもの大事件も急激な好転を見ることが出来た。そして幾百の気の毒な人々がその為に救はれた。

左に掲載した当時の新聞記事によると、御風は中学校長、女学校長とともに平安堂に滞在する知事を訪問したという。当時の校長は、前者が浮田辰平、後者が渡部坦治である。渡部坦治は、本会報冒頭の特別寄稿、渡部宏様の御祖父様。縁を感じる次第である。

親不知の惨事に―
働いた相馬御風氏
太田新潟縣知事に歌で謎をかけ
句佛法主に座を譲られて恐縮す

「金澤特信」　話はもう古い、親不知の三日の夜、北陸線が雪崩で列車が雪崩の下敷となつた、あの騒きの常時のことである。往年自然主義時代の文壇に雄飛した相馬御風氏――今は郷里の糸魚川町にあつて良寛和尚の研究に除念のない氏が、多くの人に交つて救護作業に従ひ、汽車の下敷になつた大谷句佛師を徳正寺に訪れた。句佛師は「先生の高名は僅てから承つてゐます、さあ此方へ――」と床蒲団を譲つて御風氏を上座に推した。御風氏は色々の人述から依頼された法主の談話を聞つた。師は「勿体なや頑師は紙子の九十年」の短冊を書いたのであつた。

次で話が今次の惨事に移り、師は御風氏に「隧道の「隧」の字には下の土があつたか知ら」と問いた。處が御風氏は「さうでせう」と答へた。その結果、法主の「隧道惨事にのぞみて」と云ふ題句の題は「隧道惨事にのぞみて」となつた。後ちに字の誤りを知つた御風氏は、氏一生の大失敗だつたと秘藏の短刀と良寛和尚の書いた掛軸を知事に贈き「どちらか選て、法主に遜々手紙を寄せて其の罪を謝したと云ふ。

越えて十六日糸魚川の町には多く病難者のため盛大なる追弔法會が營まれた。其法會の始まる數時間前のことであつた。御風氏は法會の導師を勤むべく糸魚川町にあつた大谷句佛師を徳正寺に訪れた。

▲「ホトトギス」三月號「斯く生きて居る」「俳句評釋」「文化學院の俳句」（鳴子）「北角研究」（諸氏）等

大正十一年二月二十五日付　読売新聞

御風違い

岡村　鉄琴

近頃古書目録で「相馬御風短冊五枚一括〇〇〇〇円」、小さな写真版で作品が紹介されているのが目に止まった。一般によく見る書きぶりと異なる。平成二十二年、御風没後六十年記念の大型『遺墨集』を編集した際、一見信じられないような書も、たくさんの情報として集めてみれば、若書き退住間もない頃の作は別人の如き書きぶりであることが証明された。少年時代の「窓竹」落款作は論外として、「御風」を名乗ってから名前の書き方だけをとっても図1のように相違がある。図2が目録で入手した分で、随分右肩が下がっている。御風の若書の特長は、字形が丸く小石をつみ上げたような配字。壮年期になると右上がりの運動が顕著となり、各文字はパズルのように入り組み、絡み合う。晩年は横画の引き方に水平運動が目立ち、とくに署名二字の形は判別しやすい尺度となる（図1-4）。

歌の内容についての当方の印象だが、門外に出なかった、多忙、病身からとらえた周囲の出来事や四季の移ろい、とくに「雪」一文字の形が特徴的な丸みを帯びた表情であるのは、一生を通して余り変わらず、また頻繁に登場している気がする。「狭き家」「わが子」など、当然家庭に触れる歌も多い。以上の観点から今回入手した短冊五枚の歌を通覧すると、おおむね御風らしい生活が詠まれているようだと感じた。五首全てを列挙する。

○元旦　二人連れ鼓打つ音の冱渡る
　万歳楽のひつじ年哉（S30・1／1）
○初雪　朝日影霰まじりの雪おきて
　正月三日いよ〳〵さむし（S30・1／3）
○風鳴ればさらさら落葉吹きまろひ
　小雪もふりつる庭おもしろき（S30・1／6）
○七草のかゆをば祝ふ日なりしに
　母の居ませず娘等さみし（S30・1／7）
○せまき家高這ひ遊ぶいとし子の
　一歳の祝日美し豊作
　（泰忠の誕生日　S30・9／15）

ひつじどしの元旦に母のいない家庭、少くとも二人は同居の子どもがいる環境が浮かび上がってきた。ただ「ひつじどし」「一歳の子」に引っ掛かるものを覚えた。段々これ以上調べたくなくなる。そんな気分が首を持ち上げ始めた頃、偶然短冊の裏にも文字が書いてあるのに気が付いた。前掲歌下にマルカッコでつけた文がそれである。

「三十年」とは昭和三十年か一九三〇年のことか。「ひつじどし」でなければならないので探ってみると、前者の元号表記を意味する。御風の没年は昭和二十五年、家庭的にも「泰忠」と名付けた子供はいない。もうおしまいである。そうなると書きぶりも「朝日影」の「影」字のつくりのくずし方など気になる点が出てきた。

これは悪意をもって作ったのではなく、同じ雅号の歌をたしなむ人物がいたのだろう。その人は相馬御風のことを知っていなかったのだろうか。ともあれ『遺墨集』を刊行するのに千点もの筆蹟を実見していたはずの者が、物欲に目がくらみ、かくの如き体験をしてしまった。

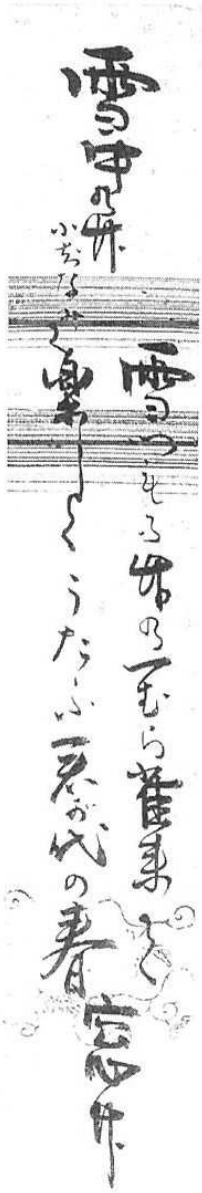


図1-1　明治27年11歳作（短冊）

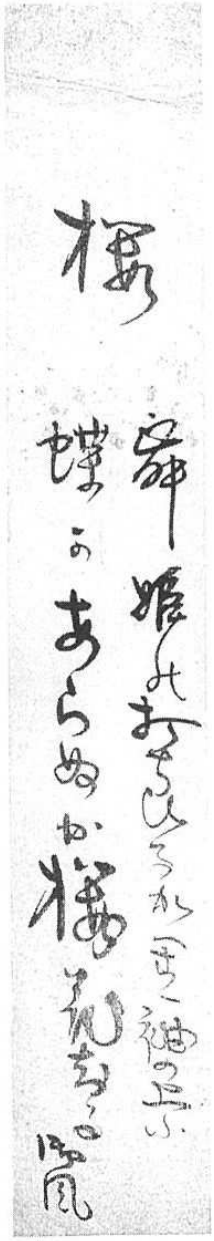


図1-2　若書作（短冊）

図1-3　若書作

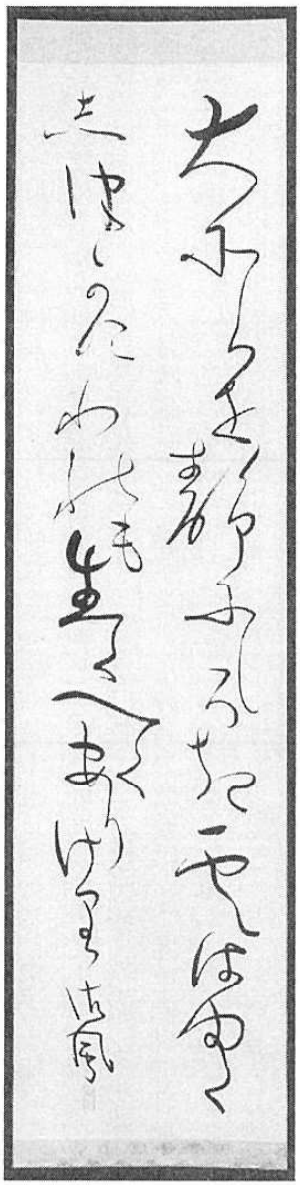


図1-4　完成期作

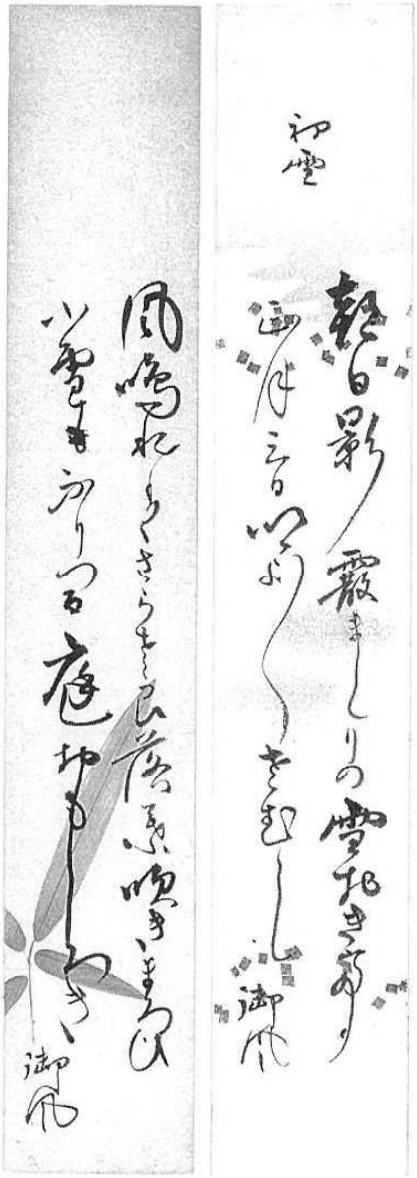


図2　「御風」違い作から（短冊）

様々な署名

御風違い分

国号「日本」の読み方と御風

榊　正喜

このたびの天皇陛下の御退位と皇太子殿下の御即位に伴う一連の皇室儀式のなかで、国璽、御璽、剣璽（つるぎと勾玉）という語がメディアを賑わせた。糸魚川に住む身としては勾玉は糸魚川産のヒスイ製であろうかというところが気になるところではあったが、もう一つ、国璽の刻字「大日本国璽」にも注目した。現用のものは明治七年（一八七四）製ということで、なるほどと思った。

国号を「にっぽん」「にほん」いずれで読むべきかについては昔から繰り返し論じられてきた印象ではあるが、政府の公式見解は十年前の国会（平成二十一年六月衆議院）で確認されており、記憶に新しい。この時は、読み方を統一する意向はあるかという質問に対し、どちらの読みも広く通用しており、一方に統一する必要はないと考える、と答えられている。世もこれに納得し、昨今はこの問題は落ち着いている印象である。

○

相馬御風随筆全集第五巻『生と死と愛』の付録「相馬御風随筆全集月報　第五号」（ともに厚生閣　昭和十一年六月二日発行）に次の記述がある。

巻中「日本の訓み方」といふやうな突拍子もない問題の提唱もあるが、これは多年私自身の懸案として来たところであつて、たま〳〵個人雑誌「野を歩む者」を発刊するに際しそれを機会として公にしたに外ならぬのであつた。しかもさうした私の微かな発言が時ならずして帝国議会の問題にまでなつたことは、私としては全く意外な結果であつた。

この一事は特にこゝに附記して置く必要があると思ふ。

これは、全集第五巻に、〝「日本」の訓み方に就て〟という「野を歩む者」第四号（昭和六年一月十五日発行）初出の小論考を再録したことに言及する内容であり、最後の「この一事は特にこゝに附記〜」の一文が興味深い。

小論考の概要は、①多年の御風自身の懸案②「日本」を「にほん」「にっぽん」「ひのもと」いずれと読むか知己の教養人知識人二百人にハガキを送り一四三の回答を得た　③結果は「にほん」六九、「にっぽん」四一、「ひのもと」一、併称三二　④問題提起「私のほんの少しばかり調査した結果について見たゞけでも、われらの唯一無二の祖国日本の呼び方が、かくもわが国民間に於て不統一な状態にある。これはこのまゝ捨てゝ置いていゝ事であらうか。それとも何とか考へ直して見なくてはならない問題であらうか。」というもので、「もし私のこの微力な試みが、何等かの形で世の有力な方々の間に於て参考になるやうな事がありましたら、それこそ望外の歓びであります。」と続き、こちらも最後に再録にあたって初出にはない次の附記がある。

私が以上の如き企てを試みたのは昭和五年十月で、それを発表したのは同六年一月であつて、「日本」の訓み方が帝国議会で論議せられたのはそれよりずっと後のことであつた。

○

月報の「帝国議会の問題」、全集附記の「帝国議会で論議」とはすなわち、第六十三回帝国議会衆議院本会議中に行われた国号に関する質疑応答である。昭和七年八月二十六日に行われた齋藤實内閣の「国務大臣ノ演説」に対するもので、佐藤與一衆議員議員が八月三十一日に質問を提出、九月四日に答弁がなされている。演説の概要は、満洲国の承認、金融、農村の諸問題、難局打開、国力充実伸張ほか、当時の時局に対する施策方針演説であり、国号云々については述べられていない。ただ、前年昭和六年九月には満洲事変が始まり、戦争に向けて時代がうねりを増してきた時期である。

佐藤の質問はいくつかに分かれているが、国号に関するものは次のとおりである。

我カ帝国ノ国号ニ関する質問

我カ国ノ国号ノ大日本帝国タルコトハ憲法ノ条章ニ依リテ明白ナリ　然レトモ之ヲ漢

字ヲ以テ記載スルトキハ何等ノ疑義ヲ生セスト雖之ヲ仮名又ハ羅馬字ニテ記載スル場合及言語ヲ以テ発表スルニ際シテハ「につぽん」並「にほん」ノ両様ニ記載発表スルコトヲ得　而シテ通常両様ニ使用セラレ未タ一定セラレアルヲ聞カス

惟フニ国号ハ一国固有ノ名称ニシテ両様に称呼セラルヘキモノニアラサルハ勿論国号ハ国体観念ヲ明徴ニシテ国民ノ愛国心ヲ喚起スヘキ原動力ノ主要ナル部分ヲ構成スルモノヲ以テ此ノ趣旨ニ依リ国号ヲ尊重スル上ヨリスルモ其ノ称呼ヲ一定スルノ要アリト信ス　内閣総理大臣及文部大臣ハ之ニ対シ如何ナル所見ヲ有セラルルヤ　外務大臣ハ外国ニ対シ我国ヲ称呼スルニ当リ其レ何レヲ用ヰラレルルアルカ

そして答弁は、実に簡単なものであった。

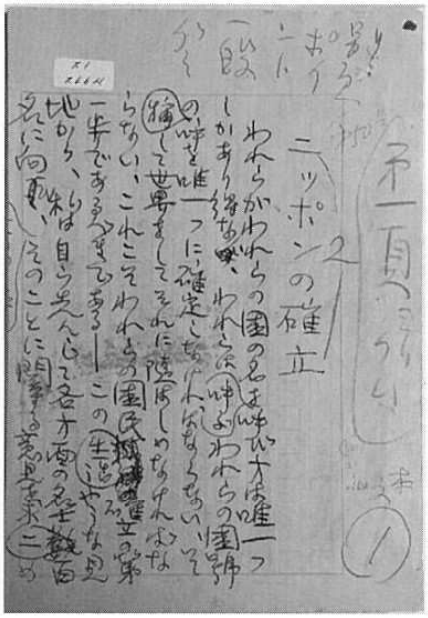
国号ノ称呼ハ慣用ニ依レリ、外国ニ対シ我国ヲ称呼スルニ当リテハ日本文ニ在リテハ日本ナル漢字ヲ用ヰ外国文ニ在リテハ外国語ヲ使用シ居レリ

佐藤與一は新潟県亀田町出身で早稲田大学卒、立憲民政党に所属した議員である。御風宛書簡としては年賀状が残るのみであり、国号の件に関してやりとりがあったかは不明。ただ、この時期の新潟四区（当時の上越圏域）の立憲民政党所属の衆議院議員としては、増田義一（現在の上越市板倉区出身、東京専門学校卒で御風の大先輩、実業之日本社社長、昭和七年一月まで衆議院副議長）、川合直次（直江津町出身、御風と旧知の仲、高田市長も務めた）らの名がある。両者は「野を歩む者」定期購読者であり、御風からの日本の読み方の照会に直接返信している。推測するに、御風がこの二人に国号の件について帝国議会に働きかけるよう積極的に接触したということではなく、月報には「全く意外な結果」とあるので、小論考を発表したのち、それが独り歩きしての一連の動きだったと思われる。

○

御風はその後、再び「日本」の訓み方に就て（「野を歩む者」第五年一号・昭和九年三月）、ニッポンの確立（同第五十号　昭和十四年八月）、で国号に関し言及しているが、御風の小論考を機に初めて国会で取り上げられたとするのは誤りである。すでに大正十五年三月の帝国議会衆議院に「我国国号の統一顕正に関する建議案（由谷義治提出）」の記録があり、ここから暫く、統一すべしという論調の質問に対し、国のあいまいな答弁という応酬が続いているように見える。また、よく知られる文部省国語調査会、昭和九年三月決議、固有名称以外で「ニツポン又ハニホンと呼ビ来レル国号の呼称ハ爾今ニツポンニ統一スルコト」は当時の政府の見解とはならなかったのは周知のとおりである。

現代に生きる我々に、御風の本名昌治の読み「しょうじ」「まさはる」問題があることについて、泉下の御風ははいかに思っていることだろう。



平成三十年度　事業報告

□御風忌・総会・講話　二十二名参加
・平成三十年五月八日　午後五時～
会場　新潟県史跡 相馬御風宅
講話　金子善八郎 様（御風会理事）
演題　御風書簡集の見どころ

□会報「洗心」第二十八号発行
平成三十年五月八日、六百部

□米吉忌　十五名参加
・平成三十年十一月二十四日　午後六時～
会場　正覚寺様
講話　冨井圭介様（元高等学校長）
演題　若き日に出会った米吉

□理事会（二回）
・平成三十年九月二十六日　午前十時～
・平成三十一年三月八日　午前十時～

□早稲田大学「稲門祭」　二名参加
・平成三十一年十月二十一日

□相馬御風顕彰ふるさと短歌大会への協力
賞品提供　児童生徒の部へ図書カード
平成三十年十二月一日
会場　ヒスイ王国館

【最優秀賞作品】
一般の部
田鹿　静夫様（糸魚川市）
胸元のV字型なり日焼けして赤銅色の土百姓たりし
児童・生徒の部
目黒　朱莉様（糸魚川小学校5年）
ほうほきぇきょ今日はバッチリ決まったね私も決めるよトランペットを

【駅北大火復興特別賞作品】
野本　蒼太様（糸魚川東小学校6年）
梅雨時のあじさいの青ツバメ舞うふるさとの空復興の虹
山田　満愛様（糸魚川中学校2年）
何もない空き地に一つ家が建つあの日を糧に未来の道へ
木島　真菜香様（糸魚川白嶺高等学校1年）
荒れはてた土地に咲くのは花たちと負けぬと決めた市民の笑顔

お悔み

御風顕彰に長い間ご尽力された会員が他界されました。
心よりご冥福をお祈りいたします。

■山崎　英俊様　平成三十年十一月逝去

各種書籍のご案内

相馬御風記念館（糸魚川歴史民俗資料館）で販売中。どうぞお買い求めください。

◇相馬御風書簡集　上・下
ともにA5判。上巻は家族（晧、文子、テル、徳治郎）宛書簡を収録。下巻は諸氏（学校や文学の道における恩師、先輩、同輩、後輩、友人知人、幼馴染、そして良寛研究における市井の協力者、さらに親戚、木蔭会同人等）宛書簡を収録。各五千円、上下巻セット購入は八千円。

◇相馬御風作詞楽譜集
A4判。平成十二年の初版に三曲を加えたかたちでの出版です。収録作品は、春よ来い、雪の日の小鳥、あられ、夏の雲、雲の峰、カチューシャの唄、初夏、ふるさと、春の雨、糸魚川小唄、かなかな蝉、落葉、うちの燕の全十三曲。七百円。

《表紙紹介》

相馬御風筆「火の用心の歌」
原稿用紙・ペン書
糸魚川歴史民俗資料館　所蔵

火の、火の、用心、火の用心
出して消すより出さぬが手柄
火事は注意の隙間から
マッチ、吸殻、火遊び、火鉢
護れ心の火消壺。

昭和十五年、大日本警防協会の依頼により作詞されたもので、四番までである。作曲は中山晋平。明治四十四年、昭和三年の糸魚川大火で実家、自宅が焼かれた御風は、「火災の難には苦い経験を持っているので、火の用心にはとかく神経が過敏になり勝ちな私である。歌詞は通俗すぎるほど通俗に作ったが少なくとも気持ちだけは真剣であった。」と記している。（「野を歩む者」第五十五号）

【編集・発行】
御風会（事務局・相馬御風記念館内）
〒九四一・〇〇五六
新潟県糸魚川市一の宮一―二―二
電話番号　〇二五（五五二）七四七一